

第1回検討会概要

(1) 開催概要

1) 開催日時

平成 27 年 10 月 8 日（木） 16 : 00～18 : 00

2) 開催場所

TKP 東京駅八重洲カンファレンスセンター カンファレンスルーム 4R

3) 議事

1. 総合評価の実施における論点について
2. 生態系サービス及び人間の福利に関する評価結果について
3. 有識者に対するアンケート計画について

4) 配布資料

資料 1 : 生物多様性及び生態系サービスの総合評価の概要

資料 2 : 生物多様性及び生態系サービスの総合評価に関する論点等

資料 3 : 生態系サービス及び人間の福利に関する評価結果

資料 4 : 専門家アンケートの実施方法について（案）

参考資料 1 : 生物多様性国家戦略 2012-2020 関連指標群のリスト及び把握状況

参考資料 2 : 生態系サービス及び人間の福利に関する指標



図 -1 第1回検討会 開催状況

(2) 検討会における主な指摘

1) 議事 1. 総合評価の実施における論点について

(i) 検討の対象範囲

- ・ 国内に限定した評価なのか、貿易を含む評価なのか。基本的には前者と思われるが、日本の課題は大部分を海外に依存していることにある。(委員)
- ・ 基本的には国内の評価ではあるが、海外における生態系サービスに依存している部分についてははっきり伝えていきたい。エコロジカルフットプリント、バーチャルウォーター等、日本からの目線ではあるがカバーする。(環境省)

(ii) サマリー

- ・ 国民のターゲットはどのようなことを考えているか。国際的な報告書は、〇〇向けサマリーなど変えたりするが、どのように考えているか。(委員)
- ・ 前回の JBO ではエグゼクティブサマリーを作成しており、今回も作成予定であるが、具体的にはこれから検討予定である。(委員)

2) 議事 2. 生態系サービスおよび人間の福利に関する評価結果について

(i) 全体の構成

- ・ 全体の構成について。福利と生態系サービスの関係について、どれがどれに結びついているかが難しい。他の要素と結びつく場合もあり、重なるものもある。50年から今にかけてどう変化してきたか、というまず一定の評価をして、変化が大きかった矢印は何だったかを抽出した方がわかりやすいのではないかと。(ただし具体的にどの変化が大きいかを抽出するのが難しい)(委員)
- ・ 自然からのサービスと技術に依存したサービスのどちらに依存するか、という両極端を選好するかどうか、という実験では、比較的自然寄りを選んでいった。実際の行動についてはわからない。年代別に解析しなおしたら、年齢で時間的な変化を推定可能であるが、まだ結果はでていない。福利との絡みと嗜好性を全国で情報を集めたので、もし活用ができればしてもらいたい。(委員)
- ・ 複雑ではあるが、最初に健康や生態系サービスをどう位置付けるかの枠組をはっきりとさせて、便宜的にこういう方法をとっている、ということをきちんと伝えるべき。(委員)
- ・ 人間の福利について。地元の人間にとって、どういう生態系サービスを重要だと考えているか、といったことを北海道で調査した。地元の方が、森林を保全していることで、CO₂を吸収していたり、生物多様性を保全していることが重要、という意識をしている。それも一つの福利であることではあるのは間違いない。MAのなかにそういう枠は入っていないが、きちんと評価していく必要があるのではないか、とは思っている。(委員)

- ・ MA のフレームワークにどこまで従うのかは論点である。日本的な意味合いでの福利、をピックアップしてやってもよいのではないか。(委員)

(ii) キーメッセージ

- ・ ある程度、単純化しないと難しい。前置きでどのような枠組みかをしっかり説明すること。メインで何を伝えていきたいか、それが伝えられるような構成としていく必要がある。(委員)
- ・ 網羅的にやるよりも中心的な思想・ストーリーをつくって、そこに関係の福利、指標をつくっていく。(委員)
- ・ 人間の生活が変わり、社会が変わり、生物多様性が変わっているという逆のストーリーになる。海外に依存した分、国内のものを使わなくなってきた、というのが重要。環境省としてどこを打ち出したいか。環境省の森里川海でも手をいれなくなったことで、劣化し使わなくなった農地が人間の福利に悪影響を及ぼしている、としているのでこういうところをメッセージとして打ち出していくのが重要。(環境省)
- ・ キーのメッセージをまずきっちりさせて、そのうえで書いていくことが重要。その時にどの指標を使っていくのが妥当かを議論するのが良いだろう。(委員)

(iii) 評価の基本的な方向性 (ポテンシャル評価の活用等)

- ・ トレンドが下がっていると、一般の人には、どうしても(生態系サービスが)下がっていると認識させてしまい、ミスリードにつながるだろう。ポテンシャルと需要の関係を、オーバーユースかアンダーユースか、その両方をみられるのであれば両者を比較しながら表現できればよいだろう。ポテンシャルがあるのにそれを伝えていないということは、アンダーユースといえる。(委員)
- ・ 豊かな生活の基本資材の評価と生態系の持っているポテンシャルとの結びつきがどうなっているかを評価する方が良い。生態系と人間がキャッチしている部分との結びつきやギャップを示すことが重要。食生活の変化など。(委員)
- ・ 総供給カロリーと自給量の構成比が変わってきている。構成比が変わる中で自給率がかわっていきっている。食の部分はいろんなデータがあり、やりやすい。白い部分が海外から入ってきている。自然からのものが人工のものに代替されてきているというのが参考になる。(委員)
- ・ これは、農林水産省で使っている図である。海外依存が増えたわけではなくて、プラスチックに変わっただけかもしれないし、いろんなことがある。結びつきを直接はかることは難しいが、プラスチック資材の生産量等はあるかもしれないし、そういう工夫があればいいのかなと。(委員)
- ・ 単純に海外依存をせずに、自然に依存していたものが工業物に置き換わったものなどは自然依存度を表現するのではないか。(委員)
- ・ 地産地消、という観点では地域のブランドを求めるようになってきた。量だけ見ると海外依存が増えたりというのはあるが、質的な面では、地元のものから

のサービスを享受するようになった、ということを伝える方がよいのではないか。直売所なども活用できるのではないか。(委員)

- ・ 潜在的供給可能量は、農水省はよく計算をしているが、農地面積が減っているので全体傾向は変わらないだろう。だが森林は潜在的供給量は増えており、国民が誤解しているところでもある。(委員)
- ・ P12の方は、農水省はカロリー供給量ベースのものは出しているが、農林水産省は食料自給力という指標を出しているので、それを参照してはどうか。(委員)
- ・ ポテンシャルとしての能力があるがそれをキャッチするニーズが下がってくるとポテンシャルが下がっていってしまう。日本人が利用するサービスが下がっていくとポテンシャルも下がっていくことが表現されるとよい。(委員)
- ・ ポテンシャルの議論について。日本の森林の利用を増やして海外依存を減らすとよいか、というわけでもない、ということを示-9での研究結果で示している。バランスを計算すると微妙。それぞれの国の生物多様性に負荷がかからないような在り方がよくて、海外依存がダメとか良いとかの一面的な議論にしない方がよい。国民向けにはわかりやすい表現が大事。(委員)

(iv) 健康に関する評価

- ・ 健康と生物多様性の関係に関心があって調べている。農業生産は経済成長につれてGDPの比率が減っていく。一方、糖の摂取量は増えていく。糖の摂取量が多い国ほどCO₂を出している。長生きではあるが医療費もかかっており、これが先進国の健康の在り方になっている。嗜好品で海外にコスト、負荷をかけさせている。農業生産を海外に依存するようになり、特に副食については海外に依存している。というのが大きな変化であった。矢印の部分については、主食の部分だけみているが、副食の部分も見た方がよいのではないか。(委員)

(v) 食文化

- ・ 和食や食文化を入れる余地はないかどうか。時系列は難しくともボックスではどうか。とはいえ、文化そのものは残っているが、食材は様々なところから入ってきている、というのが現実ではある。ただ食文化が残っていることそのものが重要ということもある。(委員)
- ・ それが良好な社会環境に寄与するものか、文化サービスになるのかはわからないが、それがローカルに存在するもので、人々の寄り合いのなかで保存されていくもの、ということであれば良好な社会環境になるし、知識を伝承していくという意味では文化サービスになる。ただしデータは乏しいというのは承知している。(委員)

(vi) 安全

- ・ 安全の項目について。表層崩壊は減って、深層崩壊が目立っている(東大の事例)。保安林の面積は増えている。現実的にはより良い方向になっていて、森林

を潤している。矢印の向きは横向きになっているが、全体としては安全は増えている、とみてもよいのではないか。(委員)

(vii) 海外への生態系サービスの依存

- ・ 海外依存度は微妙な問題であって、輸入をダメとしてしまうと、海外の発展途上国の発展を妨げることになるため、取扱いが難しい。認証制度の発達などもメッセージにしてもらい、海外の生態系や生物多様性へ視点を持っていくことが大事。チョコレートが減ったとしても、別の換金作物に代わるだけ。海外の負荷を減らす日本の消費者の選択が重要である。(委員)

(viii) ディスサービス

- ・ また野生生物の被害が変化なしとされていることに違和感がある。農山村を歩くと、フェンスとかで嚴重に囲われていたり、潜在的に野生生物の被害は増えていると思っている。そこがうまく表現できるように。対策費などでも表現しても良い。(委員)

(ix) 課題

- ・ ツーリズムなどは、最近データもすすんでいる。文献レビューを基本とするが、政策的なメッセージを込めた行政ベースのサマリーがあっても良い。政策的なメッセージとしては、今のアカウンティングシステムではこの評価を実施するのが難しい。そのような点をハイライトすると研究の面からはありがたい。全国レベルでデータと時間軸によって絞り込む必要性和そのレビューの目的はわかるが、逆に、将来に向けて、(アカウンティングシステムとして) 何が今たりていないのか、今後必要な政策として示せられればよい。(委員)

3) 議事 3. 有識者に対するアンケート計画について

- ・ P5 問2 我が国の生態系サービスのうち・・・とあるが、答える人に統一的に伝わる表現にするようにすべき。(委員)
- ・ 変化の大きさについては、大きく減少、とか、やや減少、とか。ニュアンスがあるのではないか。その他、S15のサブテーマで、将来の生態系サービスに影響を与える要因として重要なものの研究をしているので、得た情報で補完できれば良い。その時の名簿もあるので、連携も考えられる。(委員)
- ・ 過去50年というとなりに答えにくいのでは。20年ぐらいなら答えやすいのではないか。大前提が50年でもよいがアンケートでは難しいかもしれない。(委員)
- ・ JBOで50年にしたのは、それぐらいが大きな変化があるだろう、という考えだった。高度成長の前後での変化が大きい。(委員)
- ・ 専門家向けなので、20年でも50年でも答えられるかもしれない。それほど優しくしてあげる必要はない。全体的な意見としては、分けたほうが良さそうだ、ということ。(委員)
- ・ 生物多様性への影響なのか、生態系サービスへの影響なのか、ということになるのか。ドライブについては今回のアンケートではやらない、ということだが、

生態系サービスについてやってもよいのではないか？拾える可能性がある。(委員)

- ・ 需要がへったのか、貿易量の変化なのか、本当に人々の志向性の変化なのかとストーリーが複雑なので、ドライバは後半の方で吸収するのがよいかと思っている。(委員)